

研究ノート

認識のコスモロジーにむけて

—— イデイス・コップ『イマジネーションの生態学』についてのノート ——

藤井 奈津子

はじめに

イギリスの自然詩人ウィリアム・ワーズワスの詩には不思議な力がある。彼の詩によって精神的銷沈から恢復した人物のエピソードは数多く知られている。なかでも、イギリスの経済学者ジョン・S・ミルが20歳のころに陥った精神的銷沈とその恢復の過程に、ワーズワスの詩が重要な役割を果たしていた話は有名である⁽¹⁾。学者であった父親から早期の英才教育を課せられたミルは、10代の半ばごろから社会の改革者となることに邁進し、次々と論文を発表していく。しかしそのようにして早くから人々に新進の学者として認められ、将来を囑望されていたにもかかわらず、ミルは突如として重い抑鬱状態に襲われる。この原因不明の抑鬱状態にミルは数年の間苦しめられることになるのだが、あるときワーズワスの詩と出会うことによって、ミルの精神は恢復していく。

ワーズワスの詩はいったいミルに何をもたらしたのか。学校へ行かずに父親から独自の英才教育を受けていた子ども時代のミルは、同年代の子どもたちと戸外で遊ぶという経験がほとんどなかった。しかしそんな彼にも、父親の知人一家に招かれて一年間をフランスで過ごした際、彼らとともにピレネー山脈への回遊旅行をしたことがあった。そのとき少年ミルは、はじめて目にする最高級の山々の景色に、このうえなく深い感動を覚えるのであるが、まさしくワーズワスの詩に多く描かれた湖水地方の自然の風景は、ミルの心にあの子ども時代のピレネーの山々を呼び起こさせるものだったのである。けれども、もしワーズワスが単に自然の風景の美しい姿を描いてみせたというだけであったなら、彼の詩はミルに格別大きな感銘を与えはしなかっただろう。ミルは次のように述べている。「ワーズワスの詩をわたしの精神状態への良薬たらしめた根本は、それらが単なる外形の美だけでなく、その美に感激しての感情の状態、その感情に色どられる思想の状態などを表現している点であった」⁽²⁾ と。

つまり、ワーズワスの詩がミルにもたらしたもの、それは子ども時代の深い自然体験を思い出させ、その感覚に確信をもたせることであった。

さて、このワーズワスの詩にまつわるエピソードから、われわれは一つの命題を掲げてみることにしよう。それは、子ども時代における自然の中での体験は、後の創造的な生を実現していく原動力、すなわち生きる力として作用する、というものである。この命題を明らかにしていくことがわれわれの目的であるのだが、しかしわれわれにはまだその力がない。そこでさしあたり本稿では、イディス・コップの著作である『イマジネーションの生態学』⁽³⁾の読解を通して上記の命題に近づいてみたいと思う。『イマジネーションの生態学』は、コップが生涯を通して上記の命題を考え続けてきた結果生まれた著作であるが、抽象度が高いうえ、論理の飛躍が多いため、非常に難解な書物とされてきた。しかしコップの思想の根幹はたいへん興味深く、ここで彼女の著作を読解してみることは、われわれに多くの示唆を与えてくれるにちがいない。したがって以下では、コップの『イマジネーションの生態学』を通して、〈子ども時代における自然の中での体験〉と〈精神の健康〉とのあいだにどのような繋がりがあるのかを探っていきたい。

1 子どもの世界づくり

子ども時代の体験が後の創造的な生を実現していく原動力になるという考えには、ジークムント・フロイトの昇華の概念がよく知られている。乳幼児期の性欲動が大人になって脱性欲化されることにより文化的創造が生まれる、というこの魅惑的な概念は、従来より多くの人々の関心を引きつけてきた。ところがコップはこのフロイトの昇華の概念は人間存在の半面しか語っていないと主張する。なぜなら、彼女が300冊にも及ぶ創造的な仕事を残した人物たちの自叙伝・手紙・日記・回想録等を調べていった結果、これらの人物たちが創造の力を蘇らせるために戻っていくのは、主としてフロイトが潜在期と呼んで打ち捨てた、乳幼児期と思春期のあいだのあの中間期の記憶であったからだ。周知のようにフロイト理論では性欲動が重要視されるため、それが表面に現れてこないとみなされる4、5歳から11、12歳までの時期は、ほとんど議論の対象にはされてこなかった。しかしコップによると、この潜在期における子どもの世界、子どもの遊びの中にこそ、あらゆる創造的な思考の源泉を見出すことができるのである。

創造的な仕事を残した人物たちは、この潜在期の子ども時代（以下、子ども時代、とする）において、いずれも非常によく似た思い出を描写している。彼らはきまって、この時期

に抱いた外界に対するある独特な感覚について語っているのだ。たとえばコップはその一例として、バーナード・ベレンソンの自叙伝の一節をあげている。

なぜならば、私の70年の生涯を振り返ってみて、最も幸福だった瞬間を考えてみると、それはたいてい我を忘れて完全に無我の境地に浸った瞬間だったからである。自分で意識してしようとしたのではなく、文字通り無意識のうちにそれを知ったのである。

子供の頃、楽しく戸外で遊んでいるとき、そういう恍惚とした気持になったことがある。あれは5つか6つの頃だったろう、確かまだ7歳にはなっていなかった。初夏の朝だった。ライムの木立の上には、銀色のもやが爽やかにきらめいていた。辺りにはかぐわしい香りが漂っていた。母の懷に抱かれているような暖かさだった。私は——思い出そうとしなくても——まざまざと思い浮かべることができる。私が木の切株に登ると、突然そのもの (Itness) になったと感じたことを。当時はそのものなどとは呼ばなかった。言葉などいらなかった。それと私はひとつであったのだから⁽⁴⁾。

このような自己と外界とのあいだの境界が喪失し相互に浸透し合うような感覚、自己と外界との一体感は、フロイトが「大洋感情」と呼び、作田啓一が「溶解体験」と名づけたものであろう。われわれは誰もが子ども時代に、多かれ少なかれこのような感覚を経験したことがあるのではないだろうか。ところでここで重要なのは、コップが、このような自己と外界との一体感にともなう喜びを、「なることによって知る」という認識の喜びとして考えていることである。コップによると、子どもにおいて認識することと存在することは同時に起こる。なぜなら、言語体系を身につける以前の子どもは、身体全体を精神の道具にして外界を知覚するからだ。子どもはこの精神身体的な知覚によって、周囲の時間的・空間的關係を有機的に組織化し、ひとつの世界をつくりあげるのである。コップは、このような子どもの「なることによって知る」精神身体的な知覚のことを、子どもの〈世界づくり (world building)〉と名づけた。

ところでコップの思想は、ウィリアム・H・ソープをはじめとする動物行動学者たちの考え方が基盤になっている⁽⁵⁾。彼らは、行動主義者たちが実験室の人工的な環境のなかで動物の行動を理解しようとするのに反して、動物が実際に生息している場において、それらがどのようにその環境に適應しているのかを観察することで、動物の行動を理解しようとしてきた。彼らの観察によると、動物の本能的行動においては、単調に繰り返される固定化された

行動のパターンが見出される一方で、そのような固定化されたパターンが連続的に阻害されるような状況が続くと、そのパターンがきわめて大幅に変更されることが見出される。つまり、単調な環境はいつもと同じお決まりの行動を繰り返させることになるが、変化する多様な環境は可変性のある行動を要請し、現在の環境によりふさわしい適応をもたらすというのである。このことは、動物には（鳥や魚や昆虫にさえ）、既知のパターンをより統一のとれた新たなパターンにつくり変えようとする傾向（ゲシュタルト〔形態〕形成）があるということの意味している。コップが〈世界づくり〉と呼ぶもの、それはまさにこの動物行動学者たちの唱える「ゲシュタルト形成」、すなわち変化する環境の中で新たなパターンを創り出していくことにほかならない。

変化する環境の中で新しいパターンを創出していく過程は、子どもの遊びにおいてははっきりとあらわれている。たとえば、泥遊び、水遊び、ダンス、跳躍、木登り、昆虫採集などはすべて、既に存在している自己の身体パターンと自己とは異なるものとのあいだの初めての偉大な共鳴である。この共鳴は、外界の自然（nature）と人間の本質（nature）とが重なり合いながら、そこに何らかのパターンが創り出されていくことである。子供は、このような〈世界づくり〉の過程を、言語体系を身につける以前にしばしば精神身体的に感じとるのだ。したがって、コップのいう「なることによって知る」という認識の喜びとは、外界と自己とのあいだに新たなパターンを創り出していく創造の喜びであるといえよう。子どもの〈世界づくり〉とは、日々刻々と移り変わる自然界と自己とのあいだの動的な創造過程なのである。

2 認識のコスモロジー

動物行動学者たちの述べるように、動物には下等なものにさえゲシュタルト形成がみとめられる。ところがどのような動物も、そのゲシュタルト形成は生物的満足や成熟の範囲に限られており、自己の生存の必要性を超え出ることはない。それに対して人間の子どもは、他の動物種と異なり、自己の生存の必要性を超えて、いままでになかったような新しい形態をあらわしてみようという強い衝動をもっている。子どもは何かまったく新しいものを不断に創造することで自分自身の地平をとてつもなく拡げていくのだ。ここにコップが、子どもの〈世界づくり〉が、動物種におけるゲシュタルト形成よりもむしろ、生命進化における形態発生のほうに明らかに類似していると述べる理由がある。

それでは生命はどのように進化してきたのか。先に述べたように、変化する環境は生物に

新たな適応をもたらす。しかし環境の変化があまりにも大きいと、もはやその生物のスキルではどうにもならない事態が出てくる可能性がある。このとき生物種の構造あるいは行動は大規模に再組織化されることになり、その結果として生物学的な進化がもたらされる。ところでコップによると、その際、何らかの種が自分自身を再組織化させる動因は、環境の側によるのではなく、もっと奥深い衝動によるものであるとみなされなければならない。つまり、生命進化の根源には宇宙の力とでもいうべきものが想定されなければならない。この宇宙の力こそが、多彩に変化する環境に対して、さまざまな形態の生物を不断に創り出していくというのである⁽⁶⁾。

したがって、コップにとって、子どもが誰でももっている新たな形態を不断に創造しようとする強い衝動は、まさに生命進化をもたらす宇宙の力そのものである。つまり、子どもの〈世界づくり〉は、生物的生との絆を保ちながら、生物的生を超越する宇宙起源論的な性質をもつのである。それはいわば宇宙に対する適応、無限の宇宙と自己とのあいだで新たなパターンを創り出していくコスモロジカルな思索であるといえるだろう。そしてこの子どもの〈世界づくり〉にみられるコスモロジカルな認識力にこそ、われわれが後の創造的な生を実現していく原動力があるのである。

ところでコップによると、子どもが完全な人間性へといたるには、このコスモロジカルな認識力が、その子どもが属している文化の枠組み（言語体系）のなかに展開されていかなければならない。なぜなら、もし子どもの発達段階において、この言語体系への参入がなされないと、その子どもの知っている世界は、唯我的な自分自身の世界だけということになってしまうからである⁽⁷⁾。その子どもは、自分の身体と心像の内にだけ包まれてしまうのだ。したがって子どもの精神身体的な知覚がさらなる興行きをもつためには、言語体系に代表される文化の枠組みを身につけることが不可欠である。けれども重要なことは、このことは逆に、子どもの精神身体的な知覚が文化的な枠組みのなかに翻訳されるまでは、この子ども時代のコスモロジカルな認識力は、まったく特有のものであり、まったく独創的なものであることを意味する、ということである。つまり、言語体系を身につける以前の子どもの〈世界づくり〉のなかにこそ、真の創造性があらわれるのだ。だからこそコップにおいて、この段階での子どもは、ひとりひとりが独自の世界像をもつ、ただ一つの個体からなる新しい種ともいうべきものなのである。

3 子どもの世界づくりと精神の健康

これまでにみてきたように、子ども時代はひとりひとりの人生において最も活発な創造がなされる時期である。それでは、この創造的な子ども時代は、われわれの後の人生においてどのような意味をもつのだろうか。ここでふたたびわれわれはコップとともに、冒頭で紹介したワーズワスをとりあげてみることにしよう⁽⁸⁾。冒頭で述べたように、ワーズワスの詩には人々の精神を回復させる不思議な力があるが、コップによると、それは彼の詩がその核心にもっている実に健康的な創造力に秘密がある。そしてこのワーズワスの詩のもつ創造力は、ミルが特に感銘を受けた詩「幼少時の回想から受ける靈魂不滅の啓示」⁽⁹⁾において非常によくあらわれている。

「靈魂不滅の啓示」は、ワーズワスの1800年代の、ある意味では全生涯の中心問題を凝縮した詩であるといわれている。この詩は全部で11の節から構成されているが、最初の4節で彼は、子どものころは目に映るありとあらゆる光景が天上の光に包まれて見えた、しかしいまやかつて見たものを見ることはできない、あの輝きはいったいどこへ消えてしまったのか、と自らに問いかけている。ところが、この問いに対する答えをワーズワスは即座に得られず、その段階で彼はこの詩の執筆を中断してしまう。この問いに対して答えるかたちで「靈魂不滅の啓示」が完成したのは、執筆中断からおよそ2年後のことであった。

執筆中断から2年を経て、ワーズワスが得た答えはいかなるものであったのか。ワーズワスは、まず子ども時代に対して感謝と賞賛を捧げることからはじめる。彼は「子ども時代のあの執拗な問いに対して、/ 感覚と目に見える物、/ 抜け落ち、消え去るものに対する問いに対して」⁽¹⁰⁾ 感謝と賞賛の歌を捧げたのだ。「イザベラ・フェニック覚え書き」によると、子ども時代のワーズワスにとって、外界は客観的実在というよりも、しばしば内面の延長として感じられ、彼は外界の実在性に疑問を抱くことがあったという。したがって、ワーズワスは外界が客観的なものとしてあるのかどうかを確かめるため、通学の途中によく木や壁を手で触ってみたらしい⁽¹¹⁾。おそらく彼は子どもころ、先にみたベレンソンと同様、自己と外界とのあいだの境界が喪失し相互に浸透し合うような感覚、自己と外界との一体感をしばしば体験していたのだろう。そしてワーズワスはまさに、そのような子ども時代における外界への独特な感覚に対して、感謝と賞賛の歌を捧げたのである。しかし、そのすぐあとの節で彼は、いまではもうそのような自己と外界との直接的な一体化は可能ではなくなったと語る。彼は、あの輝きに包まれた子ども時代にふたたび戻ることはできないということを実感するのだ。ところがワーズワスの詩が不思議な力をもつ所以は、彼がその子ども時代の感

覚の喪失を、ただ喪失のままでは終わらせなかったことにあった。

どうしたというのだ、かつてあんなにも煌めいた輝きが
いまや私の視界から永久に消え去られたからといって。

何者も昔を呼び戻せはしない、
草に見た輝きと、花に見た栄光とを。

だが悲しむことはやめ、見つけるのだ、
残されたもののなかに、力を。
原初の共感のなかに見つけるのだ、
かつて存在した共感は永久にあり続けねばならぬ。
見つけるのだ、迸り出る慰めの心に。

死を見つめる敬虔な心と、
悟りの心をもたらず成熟のなかに⁽¹²⁾。

子ども時代に感謝と賞賛の歌を捧げることで、ワーズワスは、子ども時代への退行を願っていたのであろうか。いやそうではない。彼は、子ども時代における自然との共感の体験は心の奥深くに蓄積されるということ、そしてその自然との共感力は後になって彼の詩的精神の原動力として働くのだということを、自らに確信させようとしたのだった。だからワーズワスはこの詩の最後で次のように謳うのである。「私は心の奥底で自然の力を感じず」⁽¹³⁾。いまや「私にはつつましく開く花でさえしばしば／涙よりも深く底知れぬ感動をもたらす」⁽¹⁴⁾のだと。

「結局、成熟へ向かうということは、それが情緒的であろうとも文化的であろうとも、自己が持っている限界を認識すること、またその認識のうちにおいて苦しみを受けとめることを要求する。このことは逆に、自己と世界との間の不連続に目覚め苦しむにもかかわらず、人間には創造的に知覚することができるということを意味している」⁽¹⁵⁾とコップは述べる。つまりわれわれにとって重要なことは、子ども時代の喪失を嘆くことではなく、子ども時代における自然との共感を再び経験する力（コスモロジカルな認識力）を見出すことである⁽¹⁶⁾。そしてそのようにふたたび呼び起こされたコスモロジカルな認識力によって、われわれの硬直した生は宇宙へと開かれ、そこからまた新たな形態が創り出されていくのである。

ここまできて、われわれは、ミルがなぜワーズワスの詩に出会ったことによって、精神を

恢復させるにいたったのかが理解できるだろう。ミルはワーズワスの詩に触れることによって、もう一度自らの子ども時代を生き直し、もう一度自らのうちにコスモジカルな認識力を呼び起こしたのである。つまり、生きていくということは絶え間なく新たな形態を創造していくことであるとするならば、それは文化や社会への適応と同様に、いやそれ以上に宇宙への適応でなければいけない。そしてこの宇宙への適応の原型は、われわれの子ども時代における自然の中での体験、子どもの〈世界づくり〉にこそある。われわれは、子ども時代における自然との共感の重要性を唱えるコップの主張を、昔を懐かしむ単なるノスタルジックな考えとしてではなく、人間の生きる力というものを考えるときの根本的な思想として、いま一度耳を傾けてみる必要があるのではないだろうか。

*

本稿を執筆するきっかけは、昨年の3月に、野中真理子監督のドキュメンタリー映画『こどもの時間』を観たことにある。『こどもの時間』は埼玉県桶川市にあるいなほ保育園の子どもたちを撮影した映画だ。この映画を観ていまままでにない感動を覚えた私は、実際に映画の舞台となったいなほ保育園を訪ねてみることにした。4000坪の土地には、木造の園舎と雑木林のある起伏に富んだ園庭がつくられており、そこに馬や山羊や犬などと一緒に0歳から6歳までの子どもたちが過ごしている。保育園には決まった日課はなく（しかし放任されているのではない）、子どもたちは毎日自分たちの好きなことをして遊ぶ。ブランコもすべり台も、人形もブロックもないが、棒切れ一本あるだけで子どもたちは次々に遊びを思いつく。どの子も鼻水をたらし泥だらけ。しかしどの子も生き生きしている。

園長の北原和子先生は、保育とはこういうものだという理念があっいなほ保育園をつくったのではないという。公立の保育園に勤めていたときの経験から、もっと子どもたちを土に触れさせてあげたい、もっと子どもたちを水に触れさせてあげたい、もっと子どもたちをのびのびと走り回らせてあげたい、もっと子どもたちを……とあって出来上がったのがこの保育園なのだそうだ。しかし私はそこには和子先生なりの哲学があると感じる。和子先生は次のように語ってくれた。子どもは自然のなかで万物と触れ合うことで、自分が万物のなかのひとつとして存在するということを知る。それはその子が生きていくうえでの根っこである。そしてこの根っこがきちんとしていれば、これから先、生きていくうえで何か困難があったとしても、いつかは乗り越えていけるはずだ、と。このいなほ保育園ではコップの主

張ることが毎日当たり前のように実践されていたのである。しかし、和子先生によると、何万人もの人々が映画を観て、何百人もの人々が見学を訪れているにもかかわらず、いなほ保育園にいる子どもの数はほとんど変わらないそうである。実際、私が訪ねたときも、同じく見学に来ていたある母親は、自分の子どもを入園させることに躊躇していたようだった。和子先生いわく、人（社会）はそう簡単には変わらない。

和子先生は、子どもたちは見学者のことをちゃんと見ていて、見学者が来ているというこの光景全部が子どもたちの心には残っていく、という。彼女は、見学者の存在が、すでに子どもたちの〈世界づくり〉になんらかの影響を与えてしまっているということを見抜いている。だから子どもたちのことを第一に考える和子先生は、私たちは当たり前のことを当たり前に行っているだけなのだから、本当はひっそりと保育をさせてほしい、というのだろう。しかしそれでも多くの見学者を受け入れて下さるのは、やはりここから何かが変わっていくかもしれないと思っておられるからだと思う。人はそう簡単には変わらないが、しかし（私自身も含めて）変えていきたい。本稿は私にとってのその第一歩である。多くの病んでいる若者、多くの苦しんでいる若者がいる現在、なぜ子ども時代における自然の中で体験が必要なのかということ、昔を懐かしむ単なるノスタルジックな考えとしてではなく提唱しようとしたのが、この研究ノートの試みであった。

◆注

(1) ミルについてのエピソードは、ジョン・S・ミル（朱牟田夏雄訳）『ミル自伝』岩波文庫、1960を参照。

(2) 同上書、133頁。

(3) Edith Cobb, *The Ecology of Imagination in Childhood*, Columbia University Press, 1977（黒坂三和子・滝川秀子訳『イマジネーションの生態学 子供時代における自然との詩的共感』思泉社、1986）。

(4) Bernard Berenson, *Sketch for a Self-Portrait*, Pantheon Books, 1949, p. 18（三輪福松『ベレンソン自叙伝 肖像画のスケッチ』、玉川大学出版部、1990、18 - 19頁）。訳文を一部変更した。

(5) 動物行動学については、ウィリアム・H・ソープ（吉岡佳子訳）『生命＝偶然を超えるもの』海鳴社、1979、ウィリアム・H・ソープ（小原嘉明・加藤義臣・柴坂寿子共訳）『動物行動学をきざいた人々』（ライフサイエンス教養叢書6）培風館、1982、ランスロット・L・ホワイト編（齊藤栄一訳）『形の全自然学』工作舎、1985、アーサー・ケストラー（日高敏隆・長野敬訳）『機械の中の幽霊』ちく

ま芸術文庫、1995を参照。

(6) 厳密に言うならば、コップは生命進化と宇宙の力の関係についてこのように明確には述べていない。本稿ではコップの断片的な記述をアンリ・ベルクソンの思想から読み解いてみた。ベルクソンについては、拙論「ベルクソンにおける創造性の理論」『臨床教育人間学』第4号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座、2002を参照。

(7) コップはその例として、『嵐が丘』の著者エミリー・ブロンテをあげている。コップによると、子ども時代のコスモロジカルな認識への過度の愛着は、精神分裂病を生み出す原因ともなる。子ども時代のコスモロジカルな認識という視点からみた場合、創造と狂気はそう遠くかけ離れてはいない。

(8) ワーズワスについては、加納秀夫『ワーズワス』研究者出版、1955、山内久明・阿部良雄・高辻知義『ヨーロッパ・ロマン主義を読み直す』岩波書店、1997、山内久明「解説」ウィリアム・ワーズワス(山内久明編)『対訳ワーズワス詩集 イギリス詩人選(3)』岩波文庫、1998を参照。

(9) ウィリアム・ワーズワス「幼少時の回想から受ける靈魂不滅の啓示」(山内久明編)『対訳ワーズワス詩集 イギリス詩人選(3)』104-127頁。

(10) 同上書、119-121頁。

(11) 山内久明・阿部良雄・高辻知義、前掲書、70-78頁を参照。

(12) ウィリアム・ワーズワス、前掲書、123-125頁。

(13) 同上書、125頁。

(14) 同上書、127頁。

(15) Edith Cobb, *op. cit.*, p. 83 (黒坂三和子・滝川秀子訳、前掲書、120頁)。訳文を一部変更した。

(16) コップは、そのとき言語が、事実を説明するための道具ではなく、原初の共感力を探求するための手段になると述べる。

✦引用・参考文献

Bernard Berenson, *Sketch for a Self-Portrait*, Pantheon Books, 1949, p. 18 ((三輪福松訳)『ベレンソン自叙伝 肖像画のスケッチ』、玉川大学出版部、1990、18-19頁)。

Edith Cobb, *The Ecology of Imagination in Childhood*, Columbia University Press, 1977 ((黒坂三和子・滝川秀子訳)『イマジネーションの生態学 子供時代における自然との詩的共感』思索社、1986)。

Edith Cobb, "The Ecology of Imagination in Childhood", *Daedalus* Summer, 1959, pp. 537-548 (「子供時代における想像力のエコロジー」(黒坂三和子編)『自然への共鳴1 子供の想像力と創造性を育む』、思索社、1989)。

イディス・コップ「哲学と子供の健康」(黒坂三和子編)『自然への共鳴1 子供の想像力と創造性を育む』、思索社、1989。

藤井奈津子「ベルクソンにおける創造性の理論」『臨床教育人間学』第4号、京都大学大学院教育学研

究科臨床教育学講座、2002。

ランスロット・L・ホワイト編（斉藤栄一訳）『形の全自然学』工作舎、1985。

加納秀夫『ワーズワス』研究者出版、1955。

亀山佳明「野性の社会学にむけて」『子どもと悪の人間学 子どもの再発見のために』以文社、2001。

アーサー・ケストラー（日高敏隆・長野敬訳）『機械の中の幽霊』ちくま芸術文庫、1995。

ジョン・S・ミル（朱牟田夏雄訳）『ミル自伝』岩波文庫、1960。

作田啓一「自己と外界 自己境界の拡大と溶解」『三次元の間 生成の思想を語る』行路社、1995。

ウィリアム・H・ソープ（吉岡佳子訳）『生命=偶然を超えるもの』海鳴社、1979。

ウィリアム・H・ソープ（小原嘉明・加藤義臣・柴坂寿子共訳）『動物行動学をきづいた人々』（ライフサイエンス教養叢書6）培風館、1982。

ウィリアム・ワーズワス（田辺重治選訳）『ワーズワス詩集』岩波文庫、1938。

ウィリアム・ワーズワス（山内久明編）『対訳ワーズワス詩集 イギリス詩人選（3）』岩波文庫、1998。

山内久明・阿部良雄・高辻知義『ヨーロッパ・ロマン主義を読み直す』岩波書店、1997。

矢野智司「思想としての子どもの時間」『ソクラテスのダブル・バインド 意味生成の教育人間学』世織書房、1996。

（ふじいなつこ 京都大学大学院教育学研究科博士課程）